

# 戦後社会と宗教の役割

赤池 憲昭

本日は、皆さんと一緒に広い意味での宗教の役割を考えみたいと思います。戦後五十年たちまして、今年は昭和でいうと七十年になるんでしょうか。皆様ご承知のようなオウム真理教事件が発生いたしまして、五十年目にこのような事件の起った意味を考えてみなければなりませんが、そのオウム事件の後、連動してまた宗教法人法の改正問題も出てまいりました。誰もが、一体宗教をどう考えたらいいのかという、大きな問題に突き当たっている状況だらうと思っています。

私は宗教を研究している立場であります、同時に単

るとか、そんな考え方、やり方が宗教の名で行われ、しかもまた現在の市民社会にあって民主的手続きなどを無視した形で法律を変えようとしているとか、一連の事件が連続して起こるのを見ていますと、私たち日本人が宗教をこの際もう一回みんなで考え方直してみる必要があるはしないかと、本当に実感しております。幸い「戦後社会と宗教の役割」という、大変ありがたいテーマでお話ををする機会をもたせていただきまして、私個人としても大変感謝をしておりますし、また皆さんと一緒に一つ真剣に考えてみたいと、そういう気持ちでいます。

## 補償、統合、アイデンティティ機能

さて宗教の役割ですが、なかなか複雑な問題です。宗教の役割、言い換えますと機能主義という言葉がありますが、宗教の機能、働きをどう考えるかということは、宗教学の大変大きなテーマの一つです。私なりにどう宗教の役割論を考えるのか、今までどのように考えられてきたのか、そしてその宗教の役割に対する考え方がどう展開をしてきたのか、その問題をまず皆さんと一緒に考

に研究だけではなくて、宗教とは人間にとつて一番大切なもののだという、考え方をもつてているのですから、オウム事件をきっかけにして法律をえて、何かその法律の考え方が選挙対策というような問題が背後にあることがはつきりしてまいりまして、非常に残念に思つております。宗教とはそのような単なる選挙の票の問題ではなくて、もっと私たち人間が生きていく実存的な問題、生きることの本質的な問題ととらえていかなければならぬのに、オウム事件のように言うことをきかないものはポアしてしまえとか、あるいは注射をして財産を盗み取

えてみましょう。日本の戦後五十年という歴史の中での宗教、とりわけ教団を中心とした宗教を考えてみたいと思つております。戦後の教団史をどうとらえたらいのか、そして戦後社会の日本の中で、教団がどんな役割を果たしてきたのか、まだこれから果たさなければならぬのか、そうした流れの中で話を進めてみたいと思います。

宗教の役割をテーマにするとして、そもそも宗教とは一体何のかという、大変厄介な問題があります。いろいろな文献等を皆様もご覧になつたかと思いますが、宗教とは何かという問いに対しても哲学者、神学者、あるいは社会学者、人類学者を含めて、様々な定義があります。最近よく言われる定義の一つに「意味と象徴の体系」という言い方がありますが、と言われても簡単にはわからませんね。ある調査によりますと、百四つぐらい宗教の定義があつて、そんなにあつたら交通整理をするだけでも大変なことでしょう。

二十一世紀まであと五年ですが、おそらくこの五年間にそんなに大変な学者が出るとはちょっと思えない

ものですから、もう二十世紀を代表する最高の宗教と社会の問題についての研究者と言つてさしつかえないでしょう、マックスウェーバーというドイツの学者がいます。彼が宗教をどう考えているかを尋ねてみると結局ウエーバーは、定義はやめておこうと言つてますね。人々が宗教を考えるものと宗教と言えばいいじゃないか、最初から定義だ、ああだと、細かいことをアレコレ並べ立てても、到底これが全部のコンセンサスを得るような内容になるわけのものでもない、むしろ学者は学者なりに、あるいは一般の方は一般の方なりに、それぞれ自分で宗教についての思いをもつておられるんだから、まずはそれでよろしいんだ。それでは一体それがどんなもののか、例えばどんな役割をしているのか、人の心にどういうふうな感銘を与えてるのか、社会をどのようにまとめようとしているか、ということを具体的に我々がひも解きながら、そして最終的にこうなんだというように結論が出ればそれでいい。

宗教とは生きものでありまして、我々自身の問題であります。よく言われますが、では哲学と宗教とどう違う

ものかといふと、哲学というのは、一般的に言えば抽象的な論理を中心とするものです。宗教もちろん、宗教的論理があります。ウエーバーが大変大切に考えてきたものなんですが、しかし宗教は哲学のような意味での抽象的な論理ではなくて、これは皆さんよくおわかりだと思いますが、体験的な世界の問題であります。ただ頭の中で理屈をこねればいいのではなくて、それによって自分がどうに生きるかという、人間の生き方 자체が問題になつてくるのが、これが宗教です。

その点から申しますと、私たちは宗教の問題を扱う場合に、難しさと同時に、非常に大切な問題だということが、その中から出てくるわけですが、理屈でもつてこねまわして、こちらがよろしい、こちらが悪いという問題ではなくて、お一人お一人がそれによって自分自身を支えておられる、生きておられる、つまり体験世界というふうなものがあつて、宗教が存在します。もし宗教の論理があるとすれば、それは哲学の世界のような抽象的な論理ではなくて、もう少し違つた論理を考えいかなければならぬ。ウエーバーはそれを「意味の問題」と言

っています。この問題がきょうお話をされる流れの中で一つの結論として私が考へてゐる事柄であります。

さて、人間の心理とか、あるいは人間の社会に対する宗教の働き、機能については一般の人々もいろいろと意見をもつていて、また学者がそれぞれの角度から私たちに教えてくれています。いま細かいところはカットさせていただきまして、大きな輪廓でこの問題を考へてみましょう。

例えば、皆さんは車を運転される方はたくさんいらっしゃると思いますが、おそらく多くの方が車の中に成田山のお札、交通安全のお札をさげる場合が多いんじやないでしようか。そういったお札がそのまま宗教であると言ふのはちょっと問題がありますが、いま仮に一つの例として考へてみたいと思います。一体、なぜ交通安全のお札を車に吊るすのかという問題です。もしお札を吊るしておけば絶対に事故がないと言うのだったら、これは世界中から交通事故はなくなるかもしません。もちろんお札をさげている人も、さげたら絶対に事故はないなんて考へている方はいらっしゃらない。つまり私たち日

本人、教育の程度の高い文明化されている私たちは、お札があれば事故がないなんてことはとても考へておりません。にもかかわらずなぜ吊るすのでしょうか。

これについて二つの解釈の仕方があります。車は非常に危険な乗り物であります。自分が丁寧に運転をしても、飛び込んでくる車もあります。命を奪いかねません。常に危険を予想させる乗り物です。そこでお札をさげておけば事故がなくなるとは誰も思わないけれども、しかし、そういう危険な物を運転しているという私たちの心の不安、それをなだめてくれる意味でお札の効用がある。つまりこれは現実の問題として事故があるかないかではなくて、私たち人間の心のもち方にある作用をしてくれるんだ。宗教というのはそういうものなんだ。直接的な効用ではなくて、私たち人間の心のあり方についての一つの役割をするのが宗教だという考え方、欠けておけば事故がなくなるとは誰も思わないけれども、いるものを補償してくれる、苦しみを慰めてくれるというので、慰めの機能と言つてもよろしいのですが、これが補償機能と呼ばれている働きです。宗教は私たちの心を慰めるという、現実に直接的に問題を解決するかどうか

かではなくて、私たちの心に一定の温かな慰めの手を差し伸べるのが、これが宗教の役割なんだという考え方であります。

それに対して、またもう一人別の学者が、いやそうでないという説を立てました。宗教は不安を慰めるのではなくて、不安を与えるんだ、不安を広げるためにあるんだ、という説を出しました。不安を強めるためというと、何だかちょっと変な機能のような感じですが、私たちの心に、不安というかあるいは緊張といった方がいいかもしれません、そうした作用を及ぼすと言うのです。もしもお札も何もなければどうということもなく運転しているかもしれないのに、交通安全のお札があるから「ああ事故をおこしちゃあいかんな」という事故に対する不安感、緊張感を私たちの心に与える。そして気をつけて運転しましようと私たちの心を統一集中させる。その働きが宗教だと言うのです。繰り返せば、不安や緊張を引き起こして心を集中させる、つまり統一する。そういうところから宗教の統合機能と言います。

今のお札の例を今度は別の角度で、儀礼の側面から考

残念だ、遺族の方の悲しみ等と思うとどうにもやりきれないというような内容を必ず入れることになると思いません。しかしそれだけではなくて、もう一つは、けれどもどうぞ一つ安心してお眠りください、あとにあなたが残された遺族の方々は我々がみんなで力を出し合って支えていきますから、どうぞ安心して永遠に安らかにお眠りくださいと、必ずそういう言葉をつけるのが、弔辞のパターンになっています。

私たちは一人ひとりがみんな自分の宇宙をもつてゐる、コスモスをもっています。どういうことかと言うと、皆さんお一人お一人が自分のご両親、あるいはお子様方、あるいは友人、あるいは知人、近所の方、そうしたつながりをもつて、ちょうど蜘蛛の巣の糸のような中心に皆さんがいて、その人間関係のつながりの中で皆さん独自の世界をつくつておられる。これはお一人お一人の世界であり、顔と同じように全く同じものは絶対にありません。もちろん兄弟とか親族で重なりあう蜘蛛の糸のつながりはあるかもしれません、全く同じということはないわけであつて、その意味から言いますと、人間は、人

えてみますと、同じようなことなんですが、これも皆さんよくご承知のことですが、葬儀ですね。なぜお葬式をするのか。もちろんお葬式をすれば亡くなつた人が生き返ると信じている人がいるかもしませんし、あるいは靈魂が肉体から離れて、そして天国へ行くと信じている人があるかもしれません、宗教の役割の立場から言いますと、そういうことはちょっとわからない。どちらとも言えないことなのですが、役割の点では非常に明確です。一つは、亡くなつた方の、特にご遺族を中心として皆さんが集まつて、大変お氣の毒でした、どうぞ一つ力を落とさないで頑張つてくださいという形で激励される。創価学会では友人葬という形で、そういう行事をもつておられると聞きましたが、みんなで悲しみにある人たちを慰めてあげる働きをこの葬儀という儀式はもつてあります。つまり補償機能の働きをすることになります。しかしそれだけではないんですね。よく告別式の時に弔辞を読む場合の弔辞のコツがあります。これも皆さんはよくご承知だと思いますが、一つは今申しましたように、亡くなつた人がどんなに立派な人だったのか、大変

間関係のコスモスという言葉を使うんですが、もうその人しかもつていらない世界を誰もがもつてゐるんですね。ですからその人がもしもなくなつてしまふと、そのコスモス、宇宙は崩壊の危機にさらされる。今まであったものが無くなつてしまふ。代替できない世界ですね。そこでお葬式の機会にその方が仮にいらっしゃらなくても、その方がつくつていた宇宙はみんなで支えていくこうじゃないか。つまりこの人がもつっていた独自の世界を壊さないで、みんなで互いに力を出し合つて、そして亡くなつた人はいらっしゃらないけれども、ご遺族を中心としたそういう宇宙をいつまでも保つていただきたいという、いわば人間の一つの統合的な世界、統一的な世界をいつまでも守りたいという願いが葬儀という儀式に出ているわけです。

したがつて今お話ししましたように、葬儀一つとりましても、さつきのお札の例をとりまして、宗教には二つの大きな働きがあつて、一つは慰めの働き、一つは緊張を媒介とする統合の働きがあると一般に言われます。これが従来宗教の一大機能と言われていまして、補償機

能、統合機能と呼んでいるわけです。

実はこの宗教のもつてゐる二つの働きというのは、これは別々のものではありません。先ほどお話ししましたように、お札についても両方の側面で説明できます。葬儀についても両方の機能で説明できますから、この宗教は補償機能とか、この宗教は統合機能とか、別々の宗教の働きとして考えるのではなくて、宗教の中にある二つの働きとしてお考えになることがまず第一に大切なことです。

ところで、従来は宗教の機能論と申しますと、もっぱら今までお話した補償と統合という二大機能が指摘されてきたのですが、戦後の研究のなかで、もう一つ、重要な機能が取り上げられるようになりました。もつとも学説史の系譜からみれば、先ほどもお話しましたウエーバーの意味の問題がすでに扱つていたと言つてもよろしい。それはアイデンティティの機能と呼ばれています。他に言い換えますと自己の身元を保証する働き、あるいは自己認識の働きとも言われています。もちろん、個人の場合にも集団の場合にも適用できる働きです。

#### 戦後50年、教団が果たした社会的機能

やや機能論に時間をとられましたが、実は、これまでまとめてきました補償・統合・アイデンティティという三つの宗教の働きを、日本の戦後五十年間の教団の働きの流れとして問題にしてみたいのです。どの時代にあっても三つの機能は生きているのですが、常に均等配分で働くわけではありません。いずれかの働きが焦点となりながら教団の発展史を形成していくのですが、戦後日本の全体社会の中で、教団がどのようにその社会的機能を果たしてきたのか、このことを、これから年代を追つてたどつてみたいと思います。

昭和二十年を起點として考えてみますが、昭和二十年から三十年まで、この十年間というのは、二十五年に始まる朝鮮事変をはさんで日本人が生活の上でも価値意識の点でも大混乱の年代でした。この時代の教団史を大づかみにまとめてみたいと思うのですが、やはり従来からの伝統的教団と戦後に脚光を浴びる新しい教団組織とは区別することが妥当でしょう。ですから、この区分は、その後現在に至るまでの一つの基本軸として設定して論じることとします。

古い教団、これまでずっと日本の江戸時代から流れている、そういう教団、多くの仏教教団がありますし、神道系の組織があります。神道は特に国家神道という時代を経て、戦後神道指令で解体して、新しく神社等を中心とした、教団と言つていいかどうかは問題がありますが、一応そういう形をつくって再構築をするわけですが、組織上の分離・分立、経済的基盤（土地所有など）への打撃、および社会の適応力の喪失など混沌の年代がこの十年間の特徴としてあげられるでしょう。

一方、新しい教団はどうか。信教の自由という日本人にとっては初めての経験。それまでに信教の自由が全くなかつたとは言いませんが、常に日本ではその時の権力的な、政治的な価値が優先する社会が存続しており、宗教はいつもその支配下にあって、権力にお伺いをたてないと自分たちの活動ができませんでした。これはもう皆さんいろいろな日本の歴史を見てもおわかりになるよう、ずっと昔の聖德太子の時代までさかのばればまた別ですが、一般にはそういう政治的な価値を優先する社会ですから、信教は自由だ、ノーコントロール、ノーサポート

トと言う、今、我々にとつては常識となつてゐる宗教集団のあり方というのは、やはりこの戦後の憲法の保障から出発したと考えていい。新しい教団はもちろん仏教や神道の長い教えの流れを汲み取つてゐるわけですが、教団としては新しく成立して、自分たちの活動を始めるところになる。普通、新宗教という言い方をしますが、この時代はまさにこれらの教団にとつては前途に希望の輝く新発足の時代であり、また、かつて戦争中に弾圧された教団にとつては再建と再生の時代でありますから、旧来の宗教と比べれば非常に明るい形で歩みを始めました。新旧が大変対照的な姿勢で戦後の教団史が幕を開けました。

た。

つづいて昭和の三十年から五十年ぐらい、この時期をどういう特徴で囲むことができるかと申しますと、伝統的教団では、分裂混亂の時代がだんだんおさまります。一つは日本が経済的に成長していく過程であります。これが教団形成にも非常に大きなインパクトを与えます。そこで何とか自分たちのあり方を、教団を安定化させていきたいという試みを各教団がさかんにやつていま

もあることは事実です。

それに対し、一部には既成の教団が、アメリカやハワイが大体中心だと思いますが、外に向かつても自分の勢力を伸ばさなければいけないと考え出していく、それから神道ですと神社を、今まで国家主義の担い手だとさんざん叩かれた神社などが、もう一回日本風の宗教の価値を外に向かつて宣伝をしたいというような、そういうやり方をこの時代から始めていますから、ちょっと大袈裟かもしれません、一種の国際化を目指そうとしたと言えると思います。

新しい教団の方は、いわゆる新新宗教の芽生えがはつきりとしてきます。戦後の時代が仮に新宗教時代といったら、カルト的、オカルト的な流れが強くなつて、いろんな細かい単位の新しい宗教、新新宗教が生まれ出します。そして、戦後時代の新宗教、創価学会なんかは一番典型的なんですが、伝統宗教と並んで、と言うよりははるかに強力に、日本の宗教を単に日本人の宗教としてとどめおかないので、多国籍宗教なんて言う人もあり

す。そして安定化と同時に復活と言いますか、復興と言いますか、もう一度自分たちのもともともつていた力を元に戻したい、それにはどうすればいいだろうか、なかなか戻らない、戻らない場合にはどういうふうに転身しないかと、教団近代化の課題も含めていろいろ試行錯誤があつたと思いますが、摸索の時代であつたと言つてもいいと思います。

一方、新しい教団はまさに組織化と拡充化の時代でありますと、教団が自分たちの教団としての統合機能を大いに發揮してまとまっていく時代、そしてそれを全体社会の中に展開をしていくとする挑戦の時代であります。組織化、それから展開、こんなところが新宗教の一つの流れであつたかと思います。

更に五十年から六十年までのこの十年間、この十年間を見ますと、伝統教団の流れは何とか自分の安定化を図ろうという形はなお依然として続いていたと思います。あまり安定化を図った結果、だんだんと都市化現象に伴つて全体社会の中に埋没していくという可能性も非常に強くて、安定化というだけではちょっと言い切れない点

ますが、要するにアメリカでもイギリスでも、あるいはフランスでも、最近ではロシアでも、日本の仏教思想に共鳴する人たちの集団を次々と作っていく運動が広がります。

私はフィンランドで国際宗教社会学会というのがあります。私はフィンランドで国際宗教社会学会というのがありまして、そこへ出かけました時に、向こうで創価学会の関係の方と一緒になりまして、イギリスでいろいろと話し合う機会がありました。その時、私の車を運転してくれた人がイギリスの青年で、非常に明るい顔付きであちこち車で回ってくれました。「あなたはもともとクリスチヤンではないんですか」と聞きますと、「そうだと」

どうして創価学会の会員になられたのかと質問をしましたが、その青年は別に難しい理屈を学んでいるわけではなくなさそうでした。イギリスという国は確かにキリスト教、歴史的にはそういう国なんですが、これは皆さんもご承知の世俗化のナンバーワンの国なんですね。どのように世俗化を考えるかという一つのポイントとして、宗教の個人化という問題が世俗化だという考え方があります。キリスト教は教会型宗教ですから、必ず一週間に一回み

んなを集めるんですね。あるいはとにかくみんなで信仰を表現し合って、そして教団として、例えば福祉事業をやるとか、ボランティアをやるとか、統合機能の大変強い教団なんですね。それがだんだんとみんな教会へ来なくなる。

私はその時よりも少し前に、オックスフォードに滞在しておりました時に、試しに日曜日に教会へ行つてみたんです。やはりアングリカン・チャーチというのはカトリックの系統を引いてますから、教会 자체がすごく大きいんですね。日曜日に行つてみたら、大伽藍の中に、お年寄りがポツリポツリと一、三組いらっしゃるだけです。そこへ牧師さんが来て、困ったような顔をしていましたが黙つて帰るわけにはいかないですから、空間に向かつて何か喋つて、お茶を濁しておしまいにしておりました。私はイギリスの人はどうして日曜日に教会へ行かないんですかと聞いたら、いや日曜ぐらい休ませてくれと言つうんですね。忙しくてしようがないと。まあ別に全然信仰が無いわけではなくて、朝飯を食う時にはみんなでお祈りをしているんだから、それでいいじゃないか。

要するに教会を中心にしてまとまるキリスト教の体質が家庭とか個人の状況に分解しているんですね。これはアメリカではちょっと違うんです。イギリスは特に世俗化が進んでしまっている。もし世俗化ということを教会離れに由来する宗教の個人化と考えると、それはイギリスの場合には最も進んでいると言えるかもしません。日本の場合にはそのままではあってはならない感じを私はもつっています。

そういう中で、その青年は何か自分が非常に頼り無い、何となく不安でしようがない。それでたまたま学会に縁があつて入つて、そして学会の仕事をやつていてるけど、とても安心できるんだと言う。やはり単にものが食べられるとか、いい着物が着られるとか、もちろん我々人間というのはそういう物質的な世界にとり囲まれていますから、そういうものに対する不満とか満足とかはいつもいつもあるわけですが、その青年の言い方をしますと、みんなで一緒にこの学会の中にいるとすぐ自分には張り合いが生まれる。ところがキリスト教会だと、教会へ行つたって誰もいやしないんだ、自分のようにまだ若く

て家庭も持つていない者はすごく不安なんだ。だから難しいことは言えないが、会員になっているととても安心ですと、こう言つてました。私は非常に結構だと、ただ安心しているだけじゃなくて、もう少し学会が掲げている仏教の教理を学ばれると一層あなたの心に土台ができるいくんじゃないかと、学会に代わつて宣伝をしておきました。

話を元に戻しますが、この五十年から六十年代というのは、特に旧宗教も新宗教もある意味で同じように、日本だけではなく、外の世界の中に自分たちの宗教の拡充を求める動きを少しずつ始めているんです。例えば曹洞宗なんかはフランスの修道院と提携いたしまして、禅と修道院の默想と形態に似ているところがありますから、集団を作つてフランスの修道院へ行つて一緒に默想し、そしてフランス人に来てもらつて日本の寺院で座禅と一緒にやつてもらうというように、だんだんと多くの人々が関心を薄くしていける修行をもう一回普及したいといふ、そのためには日本だけでは駄目なんで、ヨーロッパの修道院との提携の中で試みてみようとしています。密

教系の天台ではよく外国の代表的な芸能人なんかを呼んで、比叡山の上で音楽会をやつたりして、自分たちの宗教の位置づけの再生を求めようという傾向があります。

さて六十年から七十年、平成七年までですが、この中で私はある意味で宗教が更に分解するというか、多様化する傾向が強くなつてきていると感じます。一つは既成の宗教が安定化を図り、国際化を図つて勢いを盛り返そうとする部分もありますが、制度の流れの中に埋没していくという傾向がやはりかなり大きい。

例えばお葬式ですが、今お葬式は葬儀屋さんがやるんですね。お寺さんがやるのはない。葬儀屋さんが全部仕組んで、あなたは何宗ですか、じゃああの坊さんが呼んで来ましょう、お布施はこのくらいと指示があり、あとは全部葬儀屋さんがいわゆる葬儀作業という形でやつたが、先約があるので長居はできませんと早々に切り上げて出て行かれました。一般の人たちもそれが一番手軽で簡単だからお願いしますという形になる。そうするともう私たちは、ことに仏教だと何々宗だということ

はあまり考えなくなつてきていた。こういう傾向というのは非常に怖い。

私は宗教というのは、もちろん心を慰めるとか、みんなで団結するということも非常に大切なことです、それ以上に宗教が宗教として意味を失うと、やはり消滅していくだらうと思います。意味の世界、宗教的論理による、もっと易しく言えば教えでいいんです。みんなで儀式を行うだけだと、慰めとか、あるいは結びつきの機能だけですと、宗教としての組織はもたないんですね。宗教の原点は宗教のもつてゐる教えの強さにあるのですから、勉強しない宗教は駄目です。伝統宗教でもそのことは十分感じてゐるので、何とかそれを取り戻さないといけないというので、慣習的な制度へ埋没してしまつてゐる既成宗教もありますが、一方ではもう一度組織化しようと模索しています。例えば写経運動。お経を書くことで心を慰めるという意味ももちろんあります、実際に経を書きながら、そのお経のもつてゐる意味を解いていくという、そういう効用を通じて教えを一般に認知させていこうという、認知機能と言いますが、そういう

人々の考え方インパクトを与える生活様式を変えることでその社会を向上させ、より文明的な、より教養のある社会への起動力となつたというのが、実はキリスト教の一番大きな役割と言いますが、メリットであつて、何も一神教だから偉い宗教だと何とか、そういうこととは話が違うのだと申されています。創価学会の場合もいろいろな人がいろいろと意見を戦わせながら、教団を育ててきて、これだけの大きな組織を形成した。これからは更に自分たちのポジションを全体社会の中に位置づけて全体社会をより高めていく、良い社会をつくっていくといふ、そういう役割を担つていています。

### 教団の社会的存在理由の根本命題

ここまで、いろいろと事例を組み込みながら時々横道にそれたりしましたが日本の戦後五十年に渡る宗教の役割を主として教団史の観点から眺めてまいりました。この流れを前半でお話しました宗教の三つの機能、すなわち補償機能・統合機能・アイデンティティ（自己認識）機能との関連でもう一度整理してみたいと思います。す

た働きがあります。その他、座談会とかはがき通信とかいろいろ今やっています。

一方、新しい宗教の方は、先ほど、お話ししたこの年代の、いわゆるカルト集団の登場が表に出てきます。全体社会の動向に盲目なために全体社会から崩れ去つたり、全体社会を敵に回すという、いわゆる宗教的社会的な機能から言いますと、マイナスの機能が働いていく場合が多い。カルトというのはもともとそういう性格をはらんで出て来るんだろうと思うんですが、先ほど、ちょっと時間を持つてお寺で人間の靈魂がどうこうで、大古屋の何とかというお寺で人間の靈魂がどうこうで、大儲けして警察の手入れがあつたと報道していましたが、ああいう市民社会の倫理から逸脱した傾向がこれからも出てくる可能性は十分にあると思います。

宗教社会学者として現代を代表するブライアン・ウイルソン先生はこう言っておられます。キリスト教の最も大きな功績は何であったか。それは例えばアフリカの未開社会に宣教師たちが行つて、そしてもちろんそこで布教をしたんですが、一番大きな働きは、その未開社会のすと次のようにまとめることができます。

まず二十年代から三十年代前後にかけては、補償機能が目立ちました。マックファーランドさんの著書で邦訳のあります『神々のラッシュアワー』という本があり、大変広く読まれましたが、このなかで「橋渡し機能」という適切な表現で、この年代の日本の新宗教教団の社会的機能を説明しています。戦後の混乱期、とりわけ価値観の転倒による日本人のニヒリスティックな精神状況を受け止めて、戦前から戦後への大きな精神的亀裂に架橋して民主的な新生日本へと心の結びつきと新しい価値への目醒めを導いたのが新宗教教団であると言うわけです。この年代、残念ながら伝統教団は積極的な社会的役割を果たすことはできませんでした。

三十年代ごろから六十年代にかけて(三十年から五十年、

五十年から六十年は機能の上ではまとめておきます) は、新旧両教団とも統合機能が目立った時代と言えます。特に新宗教の場合は、前の年代の補償機能を引き継ぎながら教団組織内部の統合を確保するとともに、外部の全体社会に対しても自己の主張を掲げながら挑戦していく時代、挑戦を通じて更に組織の拡大と統一とを試みていく時代でした。一方伝統教団は挑戦機能という点では新宗教のような運動型の特質は發揮できませんでしたが、徐々に戦後の混乱期から脱して自己自身の再生再興を志す教団統合の摸索を進めました。新旧両教団とも国際的な進出をはかつて組織の拡充をはかる傾向がありました。

一方、この年代から次の年代、つまり六十年代から七十年代(平成年代)にかけて、マスコミを賑わせた宗教現象が話題になりました。「宗教ブーム」の時代というものがそれで、昭和四十八年から十五年間ぐらいの期間を言います。日本の社会史で言えばオイルショックからバブル時代へと続く時代です。この期間に芽生えてくる新宗教が新新宗教などとも呼ばれている宗教で、それまでのセクト的ないしデノミネーション的性格の新宗教教団

をはかつて組織の拡充をはかる傾向がありました。

一方、この年代から次の年代、つまり六十年代から七十年代(平成年代)にかけて、マスコミを賑わせた宗教現象が話題になりました。「宗教ブーム」の時代というものがそれで、昭和四十八年から十五年間ぐらいの期間を言います。日本の社会史で言えばオイルショックからバブル時代へと続く時代です。この期間に芽生えてくる新宗教が新新宗教などとも呼ばれている宗教で、それまでのセクト的ないしデノミネーション的性格の新宗教教団

の問いは定義の問題ではなく、主体的な意味の問題、つまり教団が自己自身の行動をどう意味づけるかであり、更に日本人が無意識に抱いていた宗教意識を社会的場で問いかけることです。自らのアイデンティティを確認する——教団としては特に自分たちの教えの意味を問うことになるのですが——ことが、教団の存立あるいは教団の社会的存在理由の根本命題となるわけです。

日本の知的環境が、今まで以上に人間の精神的側面への関心を深くしつつあります。二十一世紀に向けて日本社会全体が大きな変化の予兆を感じさせていますが、「宗教とは何か」の問いは最近の一連の事件もあって、日本人全体の問い合わせになろうとしています。それでの教団がこれに答えなければならないし、その答えが教団を支える支柱となっていくでしょう。

日本の宗教は一般的には習俗的儀礼的要素の濃い形で宗教史を作っていました。このことは一面、宗教が教団的・イデオロギー的規範拘束を個々人にあまり与えなかつたという点では、特に日本社会の近代化に役立つたと言えます。しかし、他方、習俗的宗教体系は、その内部

とは一線を画することが可能なオカルト風の色合いを混えたカルト・タイプの傾向をもっています。エルンスト・トレルチの説では、カルト型教団(トレルチはミステイシズム・タイプと言っていますが)は二層分解の傾向をもち、一方では知識階級に似合う個人化の性格が強く、情報を通じての間接的なゆるい連合体の組織を形成し、他方では大衆的で狂信的な自己中心的運動型の小組織にまとまり社会からの脱落傾向を生みやすいと言っています。日本の新新宗教教団については、多角的な研究が行なわれていますし今後も議論のあるところですが、ここではそれは触れません。ただ、カルト・タイプの教団の簇生がこの第三期の課題を産み出した要因の一つであることは間違いないでしょう。

それが、アイデンティティの機能をめぐる問題です。現在の哲学再考現象などとも連動していると思われますが、教団が自己の身元をもう一度確認する働き、更に根本的には「宗教とは一体何か」という問いに改めて取り組んでいこうとする動きです。最初に宗教の定義という問題にちょっと触れましたが、ここでの「宗教とは何か」

に常に未開性への回帰、呪術性への選択的親和力(相性のよさ)を内包します。経済的にも教育水準の上でも世界一流の文明国になつたはずの日本に、しばしば市民倫理とあまりにかけ離れた呪術的事件が起るのは、日本人の宗教意識の問題に深く広い根があることを考えさせずにはおきません。「宗教を問う」などという社会的雰囲気はこれまでの日本の宗教史上に経験のなかつたことではないでしょうか。その意味で、まさにこれから日本社会は「宗教の時代」と言えるかもしれません。

戦後五十年、宗教の役割の歴史は補償から統合へ、そして、自己認知の時代へと展開しました。いずれの機能においても先導の役割をつとめ、またつとめるであろう新宗教教団の新しい世紀への船出を期待するもの大なるものがあります。常套的表現ではありますが、生きることの喜びと幸せとを認知させる宗教が、結局はその存在理由を全うできるのではないかと結びたいと存じます。

(あかいけ のりあき・愛知学院大学教授)

(本稿は一九九五年十月三十一日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです)